



Taka Ishii Gallery

Photography / Film

5-17-1 2F Roppongi Minato-ku Tokyo #106-0032, Japan

tel 03 5575 5004

fax 03 5575 5016

web www.takaishiigallery.com

email tigpf@takaishiigallery.com

細江 英公 「鎌鼬」

会期：2014年6月7日（土） - 7月5日（土）

会場：タカ・イシイギャラリー フォトグラフィー/フィルム（東京・六本木 AXIS ビル）

タカ・イシイギャラリー フォトグラフィー/フィルムは、2014年6月7日（土）から7月5日（土）まで、細江英公個展「鎌鼬」を開催いたします。本展では、細江の代表作として高い評価を得る「鎌鼬」のシリーズより未発表作品を含む28点の作品を展示予定です。

“鎌鼬”とは小さなつむじ風の中心部が真空状態になり、そこに触れた皮膚に突然鎌で切られたような傷ができる現象を指し、両腕に鋭い鎌を持ったイタチに似た妖怪として伝えられています。舞踏家 土方巽を被写体とした「鎌鼬」は1965年より撮影を始め、土方の故郷である秋田に加え、東京の柴又、巣鴨など、戦後の細江の軌跡を沿うような場所にまでも撮影地を拡張し、1969年に写真集として刊行されました。撮影は、自らの原型を故郷に見出そうとしていた土方に鎌鼬のイメージを重ね、また細江自身が忘れかけていた山形における疎開時の体験を、「東京での生活の戦後の体験と疎開の体験、そして焼け跡、今の経済繁栄、そして、この平和、このままどこへ行ってしまおうのだろう」（「細江英公に聞く」、『季刊写真映像』1号、1969年）という思いのなかで確認しようとする行為でもありました。東北の血と風土を共有する土方の肉体を媒体として「私の『記憶』を『記録』する」（細江英公「鎌鼬」、『写真・細江英公の世界』、写真・細江英公の世界展実行委員会、1988年）、被写体との関係性から紡ぎ出された物語性の強い作品となっています。

村では、子供と戯れ、道端の農夫たちに笑われ、畠の真中で野糞をたれ、お嫁さんを襲い、赤ん坊を攫って田圃を走った。そして、ほとんどの撮影は電光石火のハプニングだった。この方法は、映画でも、テレビでも、絵でも、小説でもできない、写真術だけの独断場だった。そのとき私は写真の勝利を確信した。

細江英公（「鎌鼬」、前出）

細江英公は、1933年に山形県に生まれました。51年に「富士フォトコンテスト」学生の部で最高賞を受賞し、52年、東京写真短期大学（現東京工芸大学）に入学後はデモクラート美術家協会を主催する瑛九と交流を深め、既成概念に挑む独自の芸術観を確立しました。57年、写真評論家の福島辰夫の企画による「10人の眼」展への参加を機に、川田喜久治、佐藤明、丹野章、東松照明、奈良原一高らとともに写真家集団・セルフ・エージェンシー「VIVO」を立ち上げ、当時主流の「リアリズム写真運動」に対抗した、より「私的」かつ「主観的」な写真表現を展開しました。98年紫綬褒章授受、2003年英国王立写真協会創立百五十周年記念特別賞を受賞、07年旭日小授章受章、08年毎日芸術賞受賞、10年には文化功労者に選出されるなど、その功績は国内外にて高い評価を獲得しています。



是非、貴誌・貴社にて御紹介下さいますよう宜しくお願い致します。掲載用写真の貸出など、御質問がございましたら下記までお問い合わせ下さい。

タカ・イシイギャラリー フォトグラフィー/フィルム

展覧会担当：小菅優子 プレス担当：丹生有紀

〒106-0032 東京都港区六本木 5-17-1 AXIS ビル 2F tel: 03-5575-5004 fax: 03-5575-5016

e-mail: tigpf@takaishiigallery.com website: www.takaishiigallery.com

営業時間：11:00-19:00 定休日：日・月・祝日



細江英公

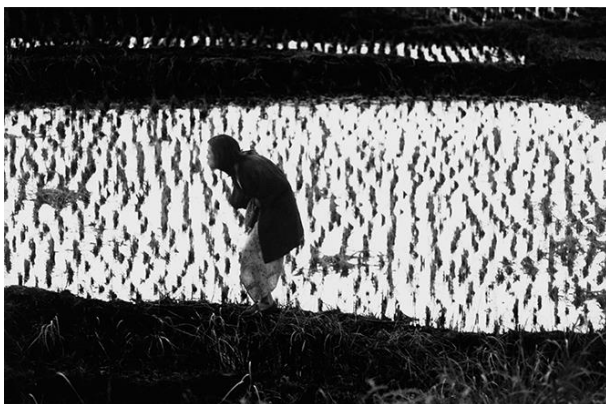
「鎌鼬」#8、1965年 / 1960年代後半～1970年代初期

ヴィンテージ・ゼラチン・シルバー・プリント

イメージサイズ：59.4 x 39.8 cm

ペーパーサイズ：60.8 x 43.4 cm

© Eikoh Hosoe



細江英公

「鎌鼬」#35、1968年 / 1960年代後半～1970年代初期

ヴィンテージ・ゼラチン・シルバー・プリント

イメージサイズ：38.7 x 56 cm

ペーパーサイズ：39 x 56 cm

© Eikoh Hosoe